

①6 神島かしまの花

「天井に紫の花が咲いている。医者が来ると花が消えるから医者を呼ばないでくれ。……わしは、これからぐっすり眠るから、おまえたちももうやすめ。明日の朝、縁の下に白い小鳥が死んでいるから、手厚くほうむってやってほしい。」

和歌山県が生んだ世界的な博物学者であり「日本粘菌学ねんきんの父」と呼ばれた「南方熊楠みななかたぐまぐす」の最期さいごの言葉である。死の直前まで、自然の神秘しんぴさを追究ついきゅうし、自然を愛し続けた熊楠であった。

南方熊楠は、一八六七年（慶応三年）、和歌山市に生まれ、一九四一年（昭和十六年）、田辺市で永遠ぼつとうの眠り（七十四歳）についたが、生涯を通じて、粘菌学や民俗学の研究に没頭し、「自然保護」にも先見せんけんの明めいを持った偉大いだいな学者であつた。生れつきの優すぐれた才能と、彼独自の学問の努力によつて十八か国語を自由に使いこなし、歴史や地理、また、宗教学や天文学などの学問をおさめ、



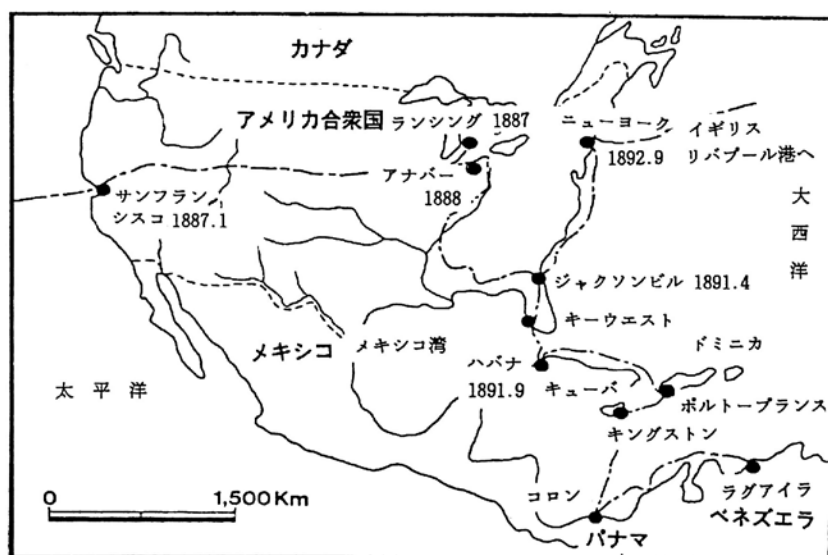
若き日の熊楠

重ね、天才的な記憶と暗記力、そして「生きている百科事典」と言われるほどの豊富な知識をもっていた。

「もっと勉強するために、アメリカに留学したい。」と、日本の大学を中途した後、研究や学問の場所を世界に求め、一八八七年（明治二十年・十九歳）、アメリカにわたった。その後、キューバ、ドミニカ、西インド諸島

多くの論文を発表するなど、学界の偉人でもあった。特に、幼少のころから自然に興味や関心をもち、今で

言えば百科事典や植物大事典に当る難しい書物を筆写するなどしながら努力を



南方熊楠が訪れたところ

などをまわりながら研究を続け、「おれの大学は、この自然なんだ。この広い大地から学ぶんだ。」と、逆境にもめげず、六年間粘菌類や地衣類（コケなど）の新種発見に努力を重ねた。それでもなお、熊楠の学問を追究しようとする姿勢は衰えることなく、今度はイギリスにわたり、研究を続けた。この間、一時は馬小屋で生活するほど苦しい条件であつたが、九年間ひたすらに研究に取り組んだ。そして、ついに、「よし、日本に帰ろう。日本に帰って、ここで身につけた学問を花咲かせてみたい。」と、決心して、十四年ぶりに日本の土を踏んだ。一九〇〇年（明治三十三年）のことである。

帰国後、熊楠は、今の田辺市に居を構え、小さな研究所を開き、昼夜を問わず研究と学問に奔走した。特に、イギリスで交友のあつた多くの学者や学界に、粘菌や地衣類の標本や論文を送り続けた。中でも、「ミナカテルラ」の新種を発見し、それに属する新種を中心に二百四十種の標本を作り、日本の粘菌学の基礎を築き上げた。そして、実に五千点にのぼる菌類の「彩色図譜」を作り、これまで積み上げてきた海外での学問の成果として、大きく花を咲かせた。現在、日本において発見されている粘菌類の半数は、熊楠によって発見されたも

のであると言われ、まさに、「日本粘菌学の父」と呼ばれるにふさわしい業績を上げた。「少しばかりの仕事をしたくらいで、博士号などもらえるがらでない。」熊楠のこれまでの数々の業績に対して、おくれせながらも「理学博士」の学位を贈る話が持ち上がったとき、このように言っであっさりと断ったと言われている。地位や肩書にこだわらず、学位も受けず、一生涯、自然がおりなす不思議さや神秘に対する学問を追い続けた熊楠の姿が、この言葉に込められている。だから、人びとは、このような熊楠を「博士号のない博士」と呼んだ。

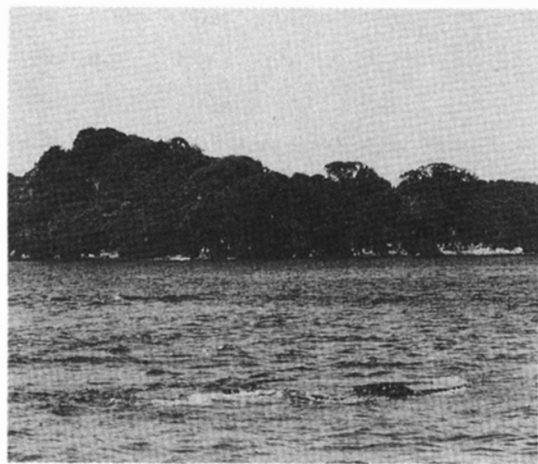
「神社を壊すこわということは、森とともに生活している動植物を滅ほろぼすことになる。鳥もすめなくなり、害虫が増え、農作物にも害を与えることになる。」と、熊楠はだれよりも早く指摘してきし、心配した。

実は、一九〇六年（明治三十九年）、全国各地にたくさんあった神社に対して、「一町村、一神社を標準とせよ。」という政府の方針が出されたのである。この方針に従って全国各地では、神社が取り壊こわされていった。熊楠は、「どこの神社にも必ずと言っていいほどうっそうと繁しげった森林がある。そこは、陰花植いんか

物（キノコ類やシダ類など）の宝庫であり、その中で動植物がバランスよく生きている。また、それだけではなく、そこに住む地域の人びとは、その神社を中心として生活しており、心のうえでも強く結び付いているのだ。だから、神社がなくなることによって人びとの生活にも重要な影響（えいきょう）を与える。」と、心配し、強く神社の大切さを主張した。

特に、田辺湾（わん）に浮かぶ「神島（かしま）」については、こ

とのほか心を痛めた（いた）。「神島」には、小さな神社があり、島全体が原生林（げんせいりん）で、われ、ハカマカズラが成育（せいよく）しているなど、まさに「自然（しぜん）の宝庫」であり、「植物学上の宝庫」であったからである。熊楠は、「自然保全（ほぜん）」の立場から運動を開始（かいし）、そして、十年。その情熱（せいねつ）とひたむきな運動が段々と世論（せいろん）を動か（うご）かし、ついに政府（せいふ）は大正に入（い）ってからこの通達（つうたつ）を取り下げることになった。こうした運動の成果（せいこ）として、各地の神社が何か所も守られた。言うまでもなく、神島も熊楠や



神 島



南方熊楠

それに共鳴する人びとの力で守られたのである。（なお、昭和の初めに、天皇がこの島においでになり、その際、熊楠からいろいろ説明を受けられた。また、神島は、昭和十一年に国の「天然記念物」に指定された。）

最近、わが国でも「自然保護運動」や「環境保全運動」などが各地で取り組まれているが、南方熊楠は、広い世界的な視野に立ち、すでに明治という時代から「自然保護」に対する先見の明を持ち、その運動に力強く取り組んでいたのである。熊楠たちの「保全運動」により守られた神島には、原生林やめずらしい植物が、今なおその姿をとどめ、私たちの生活にも、また、生物学的にも貴重な森として、そのまま残っている。

生涯一学者として、純粹にひたむきに生き抜き、人びとや地域を愛し、こよなく自然を愛し続けた「南方熊楠」。最期に言い残した「天井に紫の花が……」、この紫の花こそ、熊楠が愛した神島に咲きほこっているセンダンの花である。熊楠が見た最期の花も、やはりあの「神島の花」だったのである。